



スライム娘ちゃんの
蕩けるおっぱいで搾られたい！

ウチの村の近くに立入禁止の小さな湖がある

随分古くからの決まりだが
大人に聞いても誰も由来を知らない。

~~ただ、行った人間は
ほぼ帰ってこなかったそうだ・・・~~

それで逆に興味が湧いてしまい
大人に内緒で湖に来てしまった。

きっと何かある！と
淡い期待を抱いていたのだが
目前には平和な湖が広がるのみだ

~~このまま待っていても何も起こりそうにない
現実はこの様なものか~~

そう、まさに村に帰ろうとした瞬間 ——



「こんにちは、ほうや」

ふいに声が出て、顔をあげると
綺麗なお姉さんが立っていた



「こんにちは、ほうや」



ふいに声が出て、顔をあげると
綺麗なお姉さんが立っていた

一目でわかる、モンスターだ！



「なっ!？」

慌てて逃げようとするが
立てない!？」



「なっ!？」

慌てて逃げようとするが
立てない!？」

見ると、足が固定されていた
いつの間に・・・



「は、離してよお」

「そんなに怖がらないで」

「ただアナタと
お話したいただけだから」



話をするだけか
ほつと気を緩めた瞬間

ぬるり、と快感が走った





話をするだけか
ほつと気を緩めた瞬間

ぬるり、と快感が走った

見ると、巻きついた
ゼリー状の液体が
絶えず絶妙な刺激を与えてくる

「ふわあ．．．
は、話をするだけだって．．．」

「そうよお、話をするだけ
アナタのカラダと・・・」

優しく話かけながら
絶えずぬるりぬるりと
肉棒を扱き
ねつとり舐り続ける



「そうよお、話をするだけ
アナタのカラダと・・・」

優しく話かけながら
絶えずぬるりぬるりと
肉棒を扱き
ねつとり舐り続ける

「隅々まで
おハナシしましょうねえ・・・」



「んっ、あっ、ふうあ……っ」

意思もつ粘液の愛撫に
急ピッチで昂ぶり

登りつめようという直前
突然ピタリと愛撫が止む

ピタリ

「そんな、もうすごしで・・・」

甘い悦楽に酔いしれ
襲われている事すら忘れていた



「いろんなところで・・・
ね？」

「さあ、湖にいちっしやいな」

